

学校経営目標等	具体的計画	今年度の達成基準	自己評価			学校関係者評価
			達成状況	評価	総合評価	
1.確かな学力の定着と向上	○ユニバーサルデザインの視点を もとに、「主体的・対話的な深い学び」をめざした授業改善。	・目的に応じて根拠や理由を示しながら自分の考えを伝えることができる。「(低)自分の考えをわけまで話す」「(中)考えを言ってから理由を話す」「(高)考えを言ってから理由を話す」「相手の考えを取り入れたり比べたりして話す」 学校評価アンケート肯定的回答 85%	児童アンケート：7月88%、12月88% 2月92% 「話す（伝える）力」の育成に向けた共通の目標を月ごとに設定し、校内研修で児童の伝える力や児童をつなぐ教師のコーディネートの方について検証し、振り返りなどを継続して行ってきた。また、発達年齢に応じた「話し方」「聞き方」のスタイルを全教員で共有し、日々の指導に意識して取り組み、児童は伝える他者を意識すること、自分の考えの根拠の大切さについての意識も高まっている。	A	A	・小規模校であるが、ユニバーサルデザイン拠点校として本校が存在しているのは意義あること。外部の方にもその認識は浸透してきており、ニーズも増えている。 ・少人数であることを生かした授業づくりを期待している。目が行き届き、きめ細やかな指導ができていると思う。 ・1年生もきちんとわけを入れて発表ができている。日々の指導が定着していると感じた。
		・日々の授業で、意識的に視覚化・焦点化・共有化を行い、「授業がわかる」の項目のAB評価が90%以上である。	児童アンケート：7月96%、12月100% 2月95% 研究授業を行う際、視覚化・焦点化・共有化の視点を持ち、協議を行っている。互いの工夫を情報共有し、日々の授業に生かしている。	A		
		・全担任が2回授業公開を行い、授業改善を進める。	実施できた。 授業前の指導案検討を全体で行った上で公開授業を行い、視点を揃えて協議をすることができた。	A		
	○児童一人一人の教育的ニーズ、学習課題の達成状況を把握し、個に応じた指導及び支援の工夫。	・取り出し指導を取り入れ、個々に合わせた授業の工夫を行う。	3年と6年対象児童に国語と算数で行った。児童の実態や状況に合わせて指導内容の工夫を行っている。専門教科指導員は担任や保護者との連絡を丁寧に行い、児童の実態を見取りながら指導にあたった。結果、児童の自己肯定感の向上や落ち着いた学校生活に寄与できた。	A	B	・IICTを活用した授業が行われていた。映している教科書などとても見やすくて良い。 ・タブレットを使って児童が説明できている。しっかり使いこなせている。
		・SSW、SC、外部機関との連携を図り、支援の工夫を行う。	SCの限られた日数の中で、児童の教育相談ができた。また、SSWの定期的な来校による見取りを日々の指導に生かすことができた。	B		
		・支援が必要な児童の個別の支援計画を見直し、保護者・関係機関との連携を図り、ケース会議を実施する。	個別の支援計画の見直しを年度当初に行った。また、学期ごとの拡大ケース会も開催でき、ゴールイメージを共有しそれぞれの立場で取り組むことが共有できた。個々の支援について全教職員で話し合い、進めている。	A		
	○落ち着いた環境の中で一人一人の力を伸ばすための「学習規律の定着」。	・短期目標を設定し、振り返り、改善を行う。	月目標をもとに学級目標を設定し、毎月児童朝礼で振り返りを発表している。学級の実態に合わせて取り組むことができた。また、今年度重点とした「根拠を明らかにした発表」については、教職員は意識して取り組み、児童にも意識づけをすることができた。	A	A	
		・「授業中話をしっかり聞いて集中してがんばっている」のAB評価が80%以上である。	児童アンケート：7月92%、12月100% 2月96% 教職員で「聞き方」について共有し、各学年に応じ指導を行っている。	A		
	○「読書の推進」	・読書目標冊数(低100冊 中100冊、高80冊)を達成した児童が90%以上いる。	朝読書の時間設定、隙間時間の活用、長休業中10～15冊の貸し出し、市立図書館から年間450冊の貸し出しによる学級文庫の充実、計画的な図書購入による学校図書の充実（図書標準率94%）、図書環境づくりの工夫、集会活動、本をたくさん読んだ児童の表彰、カードを使った取組などを行った。 1・2年生139冊 3・4年生103冊 5・6年生149冊	A	A	・聞こうとする態度が大事。聞くことでコミュニケーションがとりやすくなる。
		・ファミリー読書やおすすめの本の紹介を全児童で継続して行う。	年間計画にそってファミリー読書を推進した。長期休業中ほぼ全家庭が取り組んでくださり、読書を通したふれあいを図っていただくことができた。文化委員会による集会での呼びかけや紹介、日常活動を通して工夫した取組ができた。家庭学習時間に10分間の	A		

			読書タイムも定着できている。			
	○自主的な学びにつなぐ「家庭学習の習慣化」。	・「各学年めやすの時間」を１００％の児童が達成している。	家庭学習の取組はほぼ全児童ができている。目標時間の達成は１年１００％（１名未回答）２年１００％３年７５％４年１００％５年１００％６年７５％でほぼ達成できしており、課題のある児童については個別の指導を行っている。「家庭学習の手引き」は懇談で保護者に説明し協力を仰いだ。	B	B	
		・自主学習を高学年は１週間に３日以上、低・中学年は２日以上取り組んでいる。	自学ノートは内容の充実も見られ、１冊目終了６名、２冊目終了８名、３冊目終了４名４冊目終了３名、５冊目終了２名と多くの児童が意欲的に取り組めた。職員間で継続的な指導や内容の共有、称揚をしながら取り組めた。	A		
	○朝学習や放課後学習等、個別指導の充実による基礎基本の定着。	・算数、国語の単元末のテストの平均が８５点以上である。	１年生 国９０ 算８６ ２年生 国８９ 算７７ ３年生 国８０ 算８６ ４年生 国８３ 算８８ ５年生 国８３ 算９０ ６年生 国９７ 算９５	B	B	
		・国語・算数のたしかめテストの平均正答率が８０％（現学年）以上である。	１年生 国９０ 算９５ ２年生 国８３ 算９２ ３年生 国７４ 算９０ ４年生 国７５ 算９２ ５年生 国７５ 算７７ ６年生 国８７ 算９４	C		
２．思いやりがあり、人間性豊かな子どもの育成	○互いの違いを認め合い、一人一人が大切にされる居心地の良い学級づくり	・児童アンケート「学校は楽しい」の項目のＡＢ評価が９０％以上である。	「学校は楽しい」のＡＢ評価：７月９２％、１２月１００％、２月１００％ 一人一人の児童が教室で自分らしく生活することができている。休み時間に学年を超えて遊ぶ姿も見られる。	A	A	・挨拶はよくできる子もいればなかなかできていない子もいる。 挨拶や返事ができないのは、周りの大人にも責任があると思う。保護者の中にも返事や挨拶ができない人もいる。大人がお手本となる行動をとることが大切。
		・終礼等で児童の情報共有をし、児童アンケートとそれを基にした教育相談を行い、全職員で児童を見守り、いじめの早期発見を図る。	学期に１回、児童アンケートとそれを基にした教育相談や状況に応じて不定期に、児童の気持ちを聞く機会を持っている。今年度もこの児童アンケート等によってトラブルの早期発見・解決をすることができた。また、毎週金曜日の終礼や放課後の職員室で、情報共有を行い、全職員で児童の変化を把握し、見守る態勢をとった。	A		
	○異学年集団を生かしながら、互いに助け合い、認め合う集団づくり。	・異学年が合同で行う学習を設定するなどし、優しい言葉かけができる。	校外学習や集会、運動会、学習発表会などの学校行事での関わりの中で他者意識の向上や一人一人の力を伸ばすという意図を持って行った。また、全校で行う授業や活動も年間計画に組み込んで実施した。これらを通して高学年はリーダーシップをとることや下学年は自分の役割を考えて動くことができた。	A	A	
	○全校での取組による気持ちの良いあいさつ、返事の習慣化。	・児童アンケート「あいさつをしている」の項目のＡＢ評価が９０％以上である。	児童アンケート「元気な挨拶をしている」：７月８４％、１２月８８％、２月８０％ 運営委員会があいさつ運動を行ったり、全校SSEの授業で相手を意識した気持ちの良い挨拶をすることの大切さや良さを学習した。多くの児童は元気な挨拶ができるが、固定化しており、どこでも誰にでもできるようにしていきたい。	B	B	
	○感謝と肯定的な声かけを大切にし、自己有用感と挑戦する気持ちの育成。	・児童アンケート「先生はがんばったことを認めてくれる」の項目のＡＢ評価が、９０％以上である。	児童アンケート：７月１００％、１２月９６％ ２月９６％ 全教職員で児童の「がんばりを「認める」ことを共通認識し、児童の自己肯定感を高めることを目指してきた。アンケートの結果は達成できているが、「あまり思わない」と答えた児童への対応も丁寧に行っていきたい。	A	A	
		・児童アンケート「自分には良いところやがんばっていることがある」の項目のＡＢ評価が、９０％以上である。	児童アンケート：７月９２％、１２月９２％ ２月９６％ 様々な教育活動を行う中、振り返りを大切行い自己の成長に目を向けさせた。朝礼や集会、帰りの会等で、東小の良さや友だちのがんば	A		

			り。良さを伝え合う活動を継続して行った。目標の90%は達成したが、「あまり思わない」と答えた児童は固定している。これらの児童の自己肯定感も高める手立てを講じていきたい。			
		・一輪車やなわとびなど、挑戦できる取組と評価を継続して行う。	全校で、一輪車検定やマラソン、チャレンジランキング、運動マスターに取り組めた。(運動マスター一人一人目標をもって取り組んでいた。来年度も「やり抜く力」を育て「たくましく」に向けて取り組みたい。	A		
	○家庭との連携によるメディアコントロール力の向上と基本的な生活習慣の確立	・ゲームやテレビなどに触れる時間が1時間以内の児童が80%以上である。	年間4回の家庭学習チェック週間中の平日メディアにふれる時間が30分未満の児童は平均87.5%であった。平日1時間未満の児童は99.2%であった。(1名未実施)	A		
		・メディアコントロールに関わる保護者向けの研修を行い、家庭でのルールづくりを行っている家庭が80%以上である。	保護者アンケート「テレビやゲーム、手伝いなどの家庭のルールを決めている」78.6%メディアコントロールに関わる保護者向けの研修はできず、保護者への周知・啓発のみに終わった。家庭学習チェック週間中は意識して取り組んでいるが、日常的にはルール作りが十分でない家庭もあり、やはり研修等も必要だと感じた。	B		
		・家庭学習チェック週間を実施し、家庭に情報提供を行う。	親師会と家庭学習チェック週間の取組や結果の分析、課題解決に向けた取組を共有し、相談しながら進めることができた。	A		
	○全校体育の充実と外遊びの奨励による体力づくりの推進	・一輪車乗りや外遊びの奨励、マラソン、体力テスト結果の分析をもとに取組を行い、児童の運動量の確保を行う。	「運動マスター」の取組期間では児童同士で声を掛け合って積極的に外遊びを行う姿も見られた。また、全校遊びや全校体育などの実施により、運動量の確保に努めた。一輪車検定やチャレンジランキングの取組、マラソンの実施など年間計画に沿って体作りを行った。	A	A	
3.開かれた、信頼される学校づくり	○「報告 連絡 相談 確認 記録」による職員の共通理解。	・日頃から児童の様子を職員で共有し、何でも話せる職員室にする。	全職員で全児童を育てることを共通理解し。職員室が児童や授業で良かったこと、困っていることなど何でも話せる職場になっている。金曜の終礼では特に児童の様子について細かな情報共有ができた。	A	A	・オープンに学校行事ができている。子どもたちがいろいろなことが主張できる場面があってよい。
		・生徒指導、ケース会議等の記録をきちんと残す。	専用フォルダーに保存し、指導や共通理解に生かした。	A		
	○地域・保護者と連携・協働した教育活動の推進。	・支援会議や親師会を活用して、地域・保護者と連携を深め、取組を行う。	今年度コロナが5類に移行されたことにより、地域との行事が復活した。内容については支援会議や親師会でその都度見直しをし、子どもたちにとってよりよい形を模索しながら進めることができた。多様な学びの場の確保に向けていつでもご支援してくださる体制があり、多くの協力を得られたことには感謝している。また、学校便りを全戸に配布するなど情報発信も行った。保護者の研修会や家庭学習習慣の取組、資源回収は予定どおり実施できた。運動会も親師会や地域の協力を得て実施できた。	A	A	・学校行事が地域のスケジュールに組み込まれていることで、地域も子どもも張り合いがある。地域が積極的に関わって行くことが大事。
	○学校だより、学級通信、HP等による保護者・地域への情報発信。	・保護者アンケート「教育方針や子どもの様子をよく知らせている」の項目AB評価が90%以上である。	保護者アンケートにおいて教育方針、子どもの様子いずれもAB評価が100%であった。保護者の方が学校の取組を理解し、協力してくださっており、大変ありがたい。	A	B	・地域も学校のために協力していきたい。地域と学校といっしょになって子どもたちを育てていく活動ができるとよい。
		・いじめ問題対策基本方針について親師会総会等で保護者に周知し、保護者、地域との連携に努める。	親師会総会で資料を提示して説明を行い、HPにも掲載した。	B		
		・ホームページを更新して情報提供を図る。	新しい情報がある毎に更新した。	B		
	○連絡帳等の活用による保護者との対話の充実	・「子どもについての相談に真剣にに応じてくれる」のAB評価が85%以上である。	保護者アンケートAB評価100%であった。連絡帳を積極的に活用することを心がけ、保護者と話す場を大切にした。今後も一人の子どもを家庭と協力して育てていき	A	A	

			い。			
		・「子どもの良さや努力を認めてくれる」の AB 評価が85%以上である。	保護者アンケート AB 評価100%であった。引き続き、児童の頑張りを見つけ認めるとともに保護者にも伝えていくよう努める。	A		
	○「かつたっ子15の春プロジェクト」を軸に、小学校との連携、園・中学校との接続を意識した教育活動の推進。	・ひまわり園・勝田中学校・勝田小学校と連携する活動を充実させる。	小小連携・小中連携による5. 6年の英語の学習、陸上記録会、中学校との合同クリーン作戦や学びの集会も有意義であった。保小連携として教職員が体験研修を行い、園の子どもの指導の様子を知ったり、連絡会で実践の交流などを行ったりすることで連携を深めた。また園児と小学生や教職員の交流を行うことで園児が小学校を身近に感じ、入学への不安解消にもつながっていると思う。来年度も引き続き、連携を充実させていきたい。	A		A
		・各部会で話し合いが行われ、充実した活動ができる。	各部会の担当者が集まって、有意義な実践交流や情報交換、自主的な企画運営を行うことができた。	A		